

今週の為替相場見通し(2024年6月10日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		154.55 ~ 157.48	156.72	153.00 ~ 159.00
ユーロ	(ドル)		1.0799 ~ 1.0916	1.0802	1.0700 ~ 1.0900
(1ユーロ=)	(円)		168.07 ~ 170.85	169.30	167.50 ~ 171.00
英ポンド	(ドル)		1.2694 ~ 1.2825	1.2723	1.2600 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	197.21 ~ 200.65	199.39	197.00 ~ 201.00
豪ドル	(ドル)		0.6579 ~ 0.6699	0.6582	0.6450 ~ 0.6790
(1豪ドル=)	(円)	*	102.61 ~ 104.73	103.14	102.00 ~ 104.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 153.00 ~ 159.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

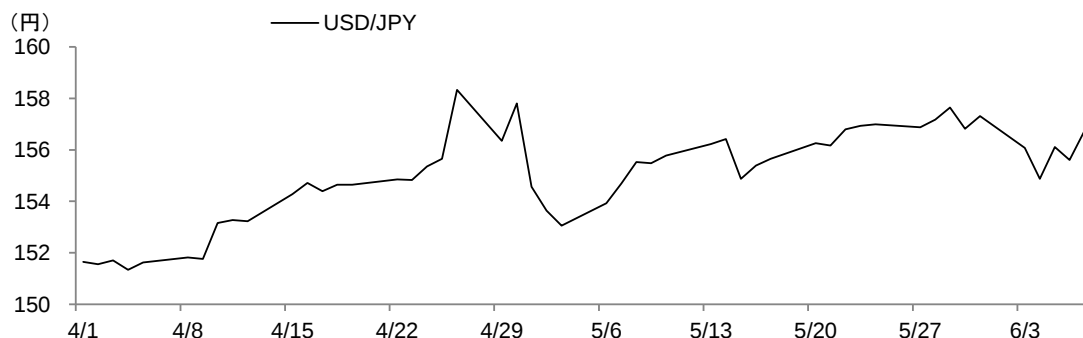
先週のドル/円は週前半に約3週間ぶりの安値圏まで下落も、その後は底堅く推移。週初3日、ドル/円は週高値の157.48円を付けた後、米金利低下に連れ安。海外時間は、米5月ISM製造業景気指数の軟調な結果に一時156円を割り込んだ。4日のドル/円は日銀による国債購入減額に関する観測報道や、米4月JOLT求人件数の冴えない結果が重石となり、約3週間ぶりの安値となる154.55円に下落した。5日、ドル/円はじり高に推移し、156円台を回復。海外時間は米5月ADP雇用統計の軟調な結果に155円台後半まで下落も、米5月ISM非製造業景気指数が市場予想を上回り一時156円台半ばまで反発。6日のドル/円は中村日銀審議委員による金融引き締めに慎重な発言を受けて下に往って来い。海外時間は、米経済指標の強弱入り混じる結果に上下動、156円を挟んでレンジ推移した。7日、ドル/円は155円台を中心とした推移が継続も、海外時間に発表された米5月雇用統計の結果が市場予想を大幅に上回ったことで一時157円台に乗せ、156.72円で越週した。

今週のドル/円は神経質な展開を予想。先週発表された米国の雇用関連指標は米4月JOLT求人件数、米5月ADP雇用統計、新規失業保険申請件数といずれも弱い結果となった。対して、米国労働需給の緩和が意識されていた中、7日に発表された米5月雇用統計は強い結果となった。このような状況下、11日(火)~12日(水)にFOMCが開催される。今回合合では、声明文における物価認識に変更があるかに加え、ドットチャートの更新で年内何回の利下げが織り込まれるかが最も注目を集めよう。また、13日(木)~14日(金)には日銀金融政策決定会合が開催される。内田日銀副総裁は5月27日の講演において「デフレとゼロ金利制約との闘いの終焉は視野に入った」「今回こそはこれまでと違う」と発言。また永見野日銀副総裁は6月4日の講演で「いくつかの指標は、基調的インフレ率がまだ2%に満たないことを示している」と述べつつ「徐々にその水準に向かって進んでいることを示している」旨明言した。今週の会合を前に、植田日銀総裁含めタカ派スタンスで足並みが揃えられた状況下、7月会合の利上げ実施の布石を打つこととなるのか注目が集まる。FOMCにおいて年内利下げ回数2回が示唆され、かつ、日銀金融政策決定会合において1兆円程度の国債購入減額が決定し利上げへ向けた動きを見せた場合、ドル/円は先週安値154.55円を切り下げる展開を想定しておくべきものとみる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/3~6/7)の値動き:

安値 154.55 円 高値 157.48 円 終値 156.72 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.0900 167.50 ~ 171.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは米金利低下やECBの「タカ派な利下げ」が材料視され上昇したが、強い米経済指標の結果を受け反転下落し週を通して上に往って来いとなった。週初3日、1.0853でオープンしたユーロ/ドルは、ユーロ圏5月製造業PMI(確報値)の弱い結果に1.08台前半まで軟化後、米金利低下が支援材料となり1.09台まで急伸した。4日、ユーロ/ドルは週高値の1.0916を付けた後、独金利低下や欧州株の軟調推移を背景に1.08台半ばに続落。その後、米経済指標の弱い結果が好感され、1.08台後半に反発した。5日、ユーロ/ドルはNY時間には米経済指標の強弱入り混じる結果を受け上下に振らされる場面もあったが、翌日にECB政策理事会を控える中、利下げ開始が意識されてか1.08台後半でじり安となった。6日、ユーロ/ドルはECB理事会が▲25bpの利下げを決定。ただ、声明文で追加利下げの示唆が無かったことや、インフレ見通しの引き上げがタカ派的と解釈され、瞬間的に1.09台に乗せた。もともと、その後は水準を戻し、1.08台後半で推移し引けた。7日、ユーロ/ドルは1.08台後半で揉み合い推移が続いた後、発表された米5月雇用統計が市場予想を上回ったことを受けた米金利急騰・ドル買いに週安値の1.0799まで下落し1.0802で越週した。

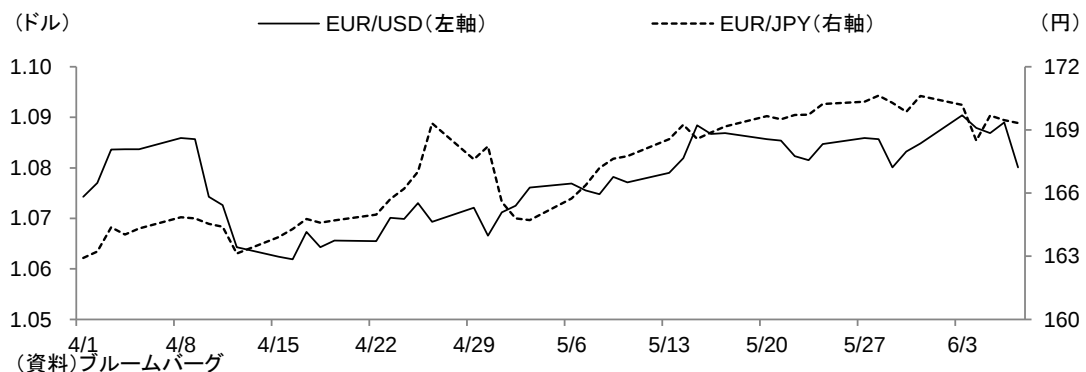
先週開催されたECB会合では基調的なインフレが緩和していることを材料に利下げを実施。一方で、茲許発表されてきた賃金データやインフレ指標の底堅さもあってか国内の物価上昇圧力は強くインフレは来年以降も目標を上回る可能性が高いと今後の断続的な利下げに対しては慎重姿勢を示した。特に発表された四半期毎の経済見通しにおけるインフレ見通しが総合・コアともに3月時点対比で上方修正がなされた。以上を背景としてECBの利下げペースが連続的にはならず、四半期毎の経済見通しを確認しつつ9月会合での追加利下げがマーケットコンセンサスとなっている。また、ECB会合後には一部メンバーが9月利下げに懐疑的と報道も出ており、ECBの利下げに対する一段の慎重姿勢がユーロの下支えとなると予想する。もともと米5月雇用統計の強い結果を受けた米利下げ織り込みの剥落にドルが買い戻されている。今週予定されている米5月CPI、FOMCなどドル由来の材料でFRBのタカ派姿勢が意識され一段とドル買いが進む場合にはユーロの上値を抑える要因となるだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/3~6/7)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0799 高値 1.0916 終値 1.0802

(対円) 安値 168.07 高値 170.85 終値 169.30



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2600 ~ 1.2800 197.00 ~ 201.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンド相場は上下に振れ幅を伴う展開となったものの、1週間を通してみれば、対ドル1.2740をはさんでほぼ横ばいとなった。6月3日公表の米5月ISM製造業指数が市場予想を下回ったことでドル売りとなった一方、6月7日公表の米5月雇用統計での非農業部門雇用者数が市場予想を大幅に上回る結果となり、ドル買いが進行した。ポンド相場は個別の材料に乏しかったが、6月6日に公表された英企業調査(デインジョンメーカーパネル)では、1年インフレ率予想は+2.9%で、4月の+2.9%から変わらずだった。市場予想では+2.8%への低下が見込まれていたなかで、インフレの粘着性への懸念が企業のCFOの間でも根強いことが示された形だ。政治絡みの話題では、英国の欧州連合(EU)離脱(ブレグジット)を主導したナイジェル・ファラージ氏が3日、7月4日に実施される総選挙に出馬すると表明するという動きが注目を集めた。右派政党「リフォームUK」(「ブレグジット党」から改称)を率い、選挙戦を戦う。ファラージ氏はこれまで、11月の米大統領選でトランプ前大統領を支援するため、7月4日の英総選挙には立候補しないと表明していた。同じく保守派を主な支持層とする保守党にとっては、さらなる逆風となる。

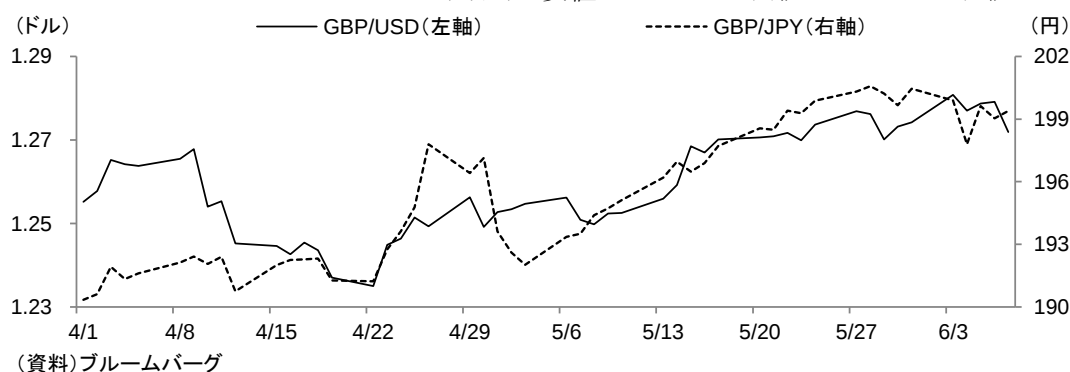
今週もポンド相場は底堅い展開が予想される、6月11日公表の労働市場関連統計が注目される。特に、4月分の週平均賃金の結果が重要であり、同月に最低賃金が約10%もの大幅引き上げになったことに伴う全体の賃金上昇への波及効果が注目される。また、来週は保守党・労働党が選挙に向けたマニフェストを公表する予定である。直ちにマーケットインパクトを伴うものとはならない公算が大きい。マーケットでは改めて英国の財政状況が懸念される展開となっていることは意識する必要があるだろう。NHS改革や、移民管理など、国民が労働党に改善を期待している政策は、いずれも資金が必要となる可能性。しかし、「影の財務相」レイチェル・リーブス氏は5月26日のBBCによるインタビューで、労働党政権で所得税増税や国民保険料の値上げは行わないと言明している。しかし、増税などを行わずに、どこに財源を求めるのか、という問題は残る。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/3~6/7)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2694 高値 1.2825 終値 1.2723

(対円) 安値 197.21 高値 200.65 終値 199.39



4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1) 今週の予想レンジ: 0.6450 ~ 0.6790 102.00 ~ 104.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

6月3日週の豪ドル相場は方向感の出ない展開の後、終盤に下落した。0.6656で週初東京市場の取引を開始。アジア時間は0.6650を挟んで小動き。北米時間に発表された米5月ISM製造業景気指数が事前予想を下回り、かつ2か月連続で節目の50を割り込んだことが確認されるとドル売りの展開に0.6690を抜ける水準まで上伸。4日の東京オープン直後には週間高値となる0.6699を示現。しかしその後公表された豪1〜3月期経常収支が事前予想に反して赤字となると豪ドル売りへと転じる。欧州時間でもこの流れが続いたが、北米時間に米4月JOLTが三年ぶりの低水準となると米債利回りが低下、豪ドルも底打ちし買い戻しの展開。5日には豪1〜3月期GDPが公表され、事前予想比小幅に下回る展開となったものの前期分の上方修正もあつて豪ドルは上昇。ただし、北米時間に発表された米5月ISM非製造業景気指数が昨年8月以来の高水準となるとドル買いに傾倒、豪ドルは0.6627まで下落。ただ、米株が高値を追うと豪ドルも買い戻される展開。6日は朝方に0.6680レベルまで豪ドルが買い進められたが、豪4月貿易収支を経て反転。ただ、海外時間ではECB政策理事会や米経済指標を受けてドル売り優勢と、豪ドルは方向感なく推移。7日も横ばいの展開が続いたが、北米時間で発表された米5月雇用統計を受け、米金利が上昇すると為替市場ではドル買いに傾倒。豪ドルは急落し、0.6579の週間安値を示現した後、0.6582で越週となった。

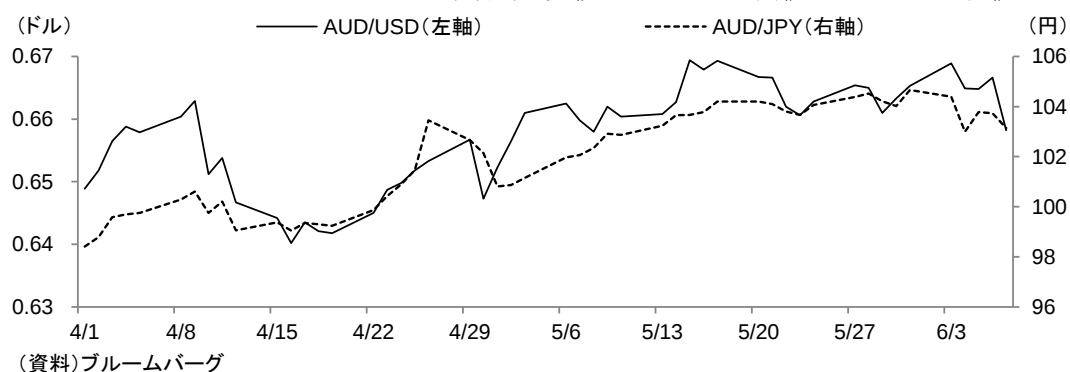
6月10日週の豪ドル相場は方向感の出ない展開を想定。前週は小動きに倣うような展開で、引き続きオーストラリア自体にテーマは見出しづらく、対外要因としてコモディティ市場の動向や直近では冴えない内容となっている中国景況感を見ながらの展開か。10日(月)は豪休場、12日(水)は中国と米国の5月CPI、FOMC、13日(木)に豪5月雇用統計、14日(金)に日銀金融政策決定会合、などが主だった予定。仮に上記が全てサブライズなくこなす様なこととなれば、利下げの目途が立っていない豪中銀と、タイミングが定まらないとはいえ年内利下げがコンセンサスとなっている米中銀、という政策格差に焦点があたり、豪ドル相場はどちらかといえば上昇基調となることも想定され得る。ただし、南半球は冬ということもあり、経済活動は盛り上がりにくいような中、積極的に上値を追うような展開は想定しておらず、大きな値動きとはならないだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/3〜6/7)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6579 高値 0.6699 終値 0.6582

(対円) 安値 102.61 高値 104.73 終値 103.14



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。